

2005年洞爺湖ウチダザリガニ調査結果と今後の対策など
 斎藤和範(北海道立旭川高等看護学院)・鈴木芳房(海洋探査)

調査結果の概要

今回、洞爺湖でNHK札幌放送局が今年9月に初めてウチダザリガニの生息を確認した壮瞥町洞爺湖温泉サンパレス周辺において、12月1日～22日まで分布調査と駆除を実施した。早期の分布調査と駆除は定着をさせないために効果的手段であり、稚エビがふ化する来春以前に抱卵雌の駆除は加入個体を出来るだけ阻止するためにも重要である。

第1回目12月1日の潜水調査では、強い西風が吹いており湖内では西から東へかなりの流れがあった。水温はおよそ7程度、ただし岸よりでは温泉の湧出があるのか場所によっては若干高く感じられた。調査した棧橋周辺及び両側100mほどの範囲では、汀線から水深3～6mまでの湖底の底質は玉石、さらに沖は砂泥となっていた。棧橋沖端の直下では水深8～10m程度、沖に向かってかなり傾斜しており、防舷具として使用していたと思われるタイヤなどが点在していた。

潜水観察での分布状況についてみると、観察及び捕獲されたウチダザリガニは1個体を除いて砂泥の湖底で発見され、水深5～15mでの出現が多くを占めた。事前のNHKによる情報と同様に棧橋の付近の出現が最も多く、次に目に付いたのは東側であり、西側ではあまり発見できなかった。捕獲したウチダザリガニは、水温が下がってきたためか若干動きが鈍く、殆どの場合簡単に手で捕獲できた。ほぼ半数程度の個体は湖底を歩行もしくはカゴの付近で餌を採食中で、残りの個体は湖底に点在するタイヤ等の陰に隠れている状態だった。特に、抱卵メスについてはその傾向が強く感じられた。捕獲された個体は殆どがある程度以上のサイズであったが、水深1m程度の石の下で、小型の個体が3尾観察(捕獲成功は1尾)された。

第2回目12月20日の潜水調査では水温3程度、水温がかなり低く湖底を歩いているものはほとんど見られず、湖底に散在する廃材やタイヤなどの陰に隠れていた。今回は棧橋東側ではほとんど生息が確認されず、棧橋から西側で多く確認され、棧橋遺構と思われる駐車場入り口付近沖合で多く捕獲された。捕獲された個体は殆どがある程度以上のサイズであったが、木材やタイヤの陰に潜んでいたと思われる体長40mm以下の小型個体も多く採集された。

今回の潜水調査及び籠調査で採集されたウチダザリガニの体長を見ると、雄149尾雌73尾(抱卵個体25尾を含む)の222尾が捕獲された。潜水調査による手取りでは57個体(雌27個体(抱卵個体11尾を含む)、雄30個体)が採集され雌雄の比率は0.9:1でほぼ半々、体長は雌で30～110mm、雄で25～135mm(抱卵個体76～110mm)であった。籠調査では165個体(雄118個体、雌47個体(抱卵個体14尾を含む))が採集され雌雄の比率は0.39:1で雄の比率が高かった。体長は雌57～94mm(抱卵個体79～92mm)、雄54～126mmであった。籠では体長54mm以下の小型個体採集することが出来なかった。

今回採集された雌雄の頭胸甲長を

浜野(1992)によるBERTALANFFYの成長式

$$\text{雄} : Lt = 162.0(1 - \exp(-0.03147(t + 2.771)))$$

$$\text{雌} : Lt = 162.0(1 - \exp(-0.02588(t + 4.437)))$$

に当てはめてみると、

雌の最小頭胸甲長12.9mm、雄の最小頭胸甲長10.8mmでは0年級群となり、X年級群に相当し、雌の最大体長110mm(頭胸甲長約47mmに相当)ではIX年級群となり、雄の最大体長135mm(頭胸甲長約63mmに相当)ではおよそXIII年級群に相当する。また、抱卵雌個体の最小頭胸甲長35mmはV年級群、最大体長110mm(頭胸甲長約47mmに相当)ではIX年級群に相当すると考えられる。体長組成から頭胸甲長を推定し生息する年級群を類推すると、雌ではII～III年級群、V～VI年級群に相当する体長の個体が多く、雄ではIV年級群、VI～VII年級群に相当する体長の個体が多く生息していた。また今年生まれと考えられる若齢の個体も確認された。

これらのことから昨年放流されたものではなく、少なくとも4年ほど前には放流されていたので

はないか。昨年9月に支笏湖でウチダザリガニを見つけ北海道新聞で報道された小野寺氏の話では4・5年ぐらい前から見ていたということから(林私信)、同時期に洞爺湖にも放流されたのではないだろうか？放流が誰によってどこから持ち込まれたのかは今のところ不明で推定するのは難しいであろう。現在丸瀬布の武利ダムに生息する個体が「塘路湖にて購入したものを放流した」と言う話も聞くため、購入したものを放流したとすると釧路支庁管内の阿寒湖もしくは塘路湖で購入したものを放流した可能性もある。しかし、現在道東域のみならず道北域においてもこのザリガニの生息が確認されている。道東域ではこのザリガニが生息する河川湖沼の側のキャンプ場などで、ウチダザリガニ釣りを行っている子供達をよく見かけることから、採集した個体を持ち帰り近くの川や湖沼に放流するということも考えられる。また、キャンプの途中捕まえたものの飼ひ切れなくなり、道程途中の河川湖沼に放流するということも考えられる。現実には釧路市や根室市など市内の池に突然ウチダザリガニやアメリカザリガニが出現する例が多々見られる。

洞爺湖でウチダザリガニを見つけたNHK札幌放送局の佐藤氏の話では、洞爺湖西岸で2カ所、中島で1カ所潜水をしたがそこでは見あたらなかったということであり、今のところ湖全域に分布が広がっているわけではなさそうである。今回の調査では分布は分布範囲を特定することが出来なかったが、分布はサンパレス周辺だけに限定されているのではなく、西よりの洞爺湖温泉街に広がっている可能性が大きい。来春以降効果的な駆除を行うため、潜水調査による生息範囲の特定や稚エビを捕獲できる効率良い漁具の検討が必要と考えられる。沿岸からの罾による捕獲だけでは、駆除の観点からは不十分であると考えられ、漁船などを動員した沖合域の分布調査や駆除活動必要と考えられる。

在来生態系保全のために

分布拡大の主な原因は放逐である。ペットブームから道内外のペットショップやホームセンターなどでも高値で売られており、売れ残りを業者が放逐したという話も聞く。生息地周辺では捕まえたりやお祭りやイベントでもらった個体を飼育しきれず、近くの川や池に放逐することも大きな要因だ。

駆除や個体数減少には漁獲圧をかける方法が有効だが、官公庁の駆除努力だけでなく漁協や地域の協力が欠かせないと感じる。官民を巻き込んだ「ウチダザリガニ・バスターズ」等外来種駆除キャンペーンを行ったり、「環境に優しい漁業協同組合」を打ち出し、漁獲物のイメージアップを図ったり料理法や食材加工の開発により付加価値つけた販売戦略も必要であろう。駆除した水揚を補助金として交付したり売り上げの一部を駆除基金とする等の工夫も考えられる。国立公園ではパークボランティアの協力も不可欠である。

放逐は「命の大切さ」から発する善意？が多いが、放たれた個体が在来生物の生息場や餌生物を奪ったり病原菌を媒介し、生態系を攪乱する可能性を伝える必要がある。本当に「命の大切さ」を考えるなら、一つの命を助けることで他の多くの命が奪われることも教える必要があるだろう。外来種問題は総合学習や環境教育の中で身近な自然や郷土の歴史を振り返る良い教材となる。教科書・副読本で取り上げたり社会教育の中で外来種の脅威を伝えていく取り組みが早急に必要と考えられる。

電話&ファックス 0166 - 66 - 0432

E-mail:kazu-saito@pop06.odn.ne.jp

斎藤和範

別添

